

日本語と中国語における可能表現の対照

—テンスと意味分類の角度から—

A Contrastive Study of Possibility Expressions in Japanese and Chinese: Focusing on Tense and Semantics

曹 峻 璋

CAO Junwei

This paper aims to describe the similarities and differences between possibility expressions in Japanese and Chinese, particularly from the viewpoint of tense and semantics. Possibility expressions are classified into potential, actual, and realis possibilities based on the relation to tense. Chinese differs from Japanese in that a realis possibility in past tense cannot be expressed using possibility expressions. Instead, Chinese utilizes a resultative complement. Possibility expressions are divided into ability and probability from a semantic aspect. In contrast to Chinese, Japanese possibility expressions do not denote probability. The three Chinese grammatical markers for possibility expressions have different ranges of use: *neng* has the widest coverage, whereas *hui* is restricted. However, the two Japanese grammatical markers for possibility expressions have almost the same scope of use.

キーワード： 対照言語学、可能表現、テンス、意味分類

Keywords: Contrastive linguistics, Potential expression, Tense, Semantic classification

0. 日本語と中国語における可能表現の形式

本論文は曹峻璋(2022)の内容に基づいて、テンスと意味分類という二つの角度から日本語と中国語における可能表現を対照し、両言語の可能表現についての共通点と相違点を解明するものである。

本節では、まず日中両言語における可能表現の形式と本論文で取り上げる研究対象を紹介する。

日本語における可能表現の形式について、金子(1980)、渋谷(1995)、青木(1980)、小矢野(1991)などからの指摘に基づいて、日本語の可能表現は主として以下の四種類の形式によって表現される。

- (1)①例(8)のように、動詞の語幹に接辞「レル・ラレル」を後接させる。
②例(9)のように、可能の意味を持つ「可能動詞」¹を用いる。
③例(10)のように、動詞の後ろに「(ことが) できる」という形式を後接させて従属節化する。
④例(11)のように、動詞の語幹に接辞「ウル・エル」を後接させて複合動詞化する。

(2)セロリは葉も食べられる。

(3)彼はサハ語が話せる。

(4)太郎は100メートル10秒で走ることができる。 (渋谷 1993:39)

(5)将来、東海地震が起こりえる。 (渋谷 1993:40)

なお、渋谷(1995)は、(1)②の可能動詞(五段動詞から派生する「読める/作れる」など)と(1)③の助動詞ラレル(一段、カ変動詞から派生する「寝られる/来られるなど」)両者が相補分布を成すと見ることができるので、一括して動詞の「可能形」と呼ぶにした。本論文では渋谷(1995)に従って、(1)②の「レル・ラレル」と(1)③の「可能動詞」を一括して動詞の「可能形」と呼ぶ。

また、ヤコブセン(1989)、張威(1998)、大崎(2005)、遅皎潔(2013)などからの指摘によると、日本語では可能表現がなされる自動詞文もある。

(6)a いくら押しても、ドアが開かない。

b. いくら押しても、ドアを開けることができない。 (ヤコブセン 1989:240)

(7)a. 林檎は全部この箱に入らない。

b. 林檎を全部この箱に入れることができない。 (ヤコブセン 1989:240)

例文(6)、(7)が示すように、これらの自動詞文はそれぞれ「開けることができない」と「入ることができない」に置き換えることが可能であるので、やはり可能表現とある程度関係があるであると考えられる。本論文では、先行研究を踏まえ、主に動詞の「可能形」と「(ことが) できる」という二種類の可能形式で表現される日本語の可能表現を研究対象として取り上げ、考察する。

一方、中国語における可能表現の形式について、劉月華(1980)、朱德熙(1995)などからの指摘に基づいて、中国語の可能表現は主として以下の二種類の形式によって表現される。

¹ 「可能動詞」とは、五段(四段)活用動詞が下一段活用に転じて可能の意を表現するようになったものである。例えば、「話せる」「取れる」「書ける」など(『国語学大辞典』p.170)。

(8) ①能願動詞²型：能願動詞“能”、“会”、“可以”+動詞

②補語³型:A 類 動詞+“得”/“不”+結果補語/方向補語⁴

B 類 動詞+ “得” / “不” +了 (liǎo)

C 類 動詞+ “得” / “不得”

(9) 我 {会/能/可以} 游泳。

(私 できる 泳ぐ)

「私は泳げる」

(10) a. 这个 西瓜 不 大, 咱们 吃 得 完。

(この スイカ 否定 大きい 私たち 食べる 肯定 終わる)

「このスイカが大きくないから、我々は食べ切れる」

b. 我 觉得 这个 雨 下 不 了。

(私 思う この 雨 降る 否定 完了)

「雨が降らないと思う」

c. 他 倒 在 椅子上, 动弹 不 得。

(彼 倒れる いる 椅子上 動く 否定 得る)

「彼が椅子に倒れて動かない」

例文(9)は可能の意味の持つ能願動詞“能”、“会”、“可以”「できる」を動詞に前置させる能願動詞型の可能表現である。例文(10)は動詞と補語の間で“得”(肯定)、“不”(否定)を挿入させる補語型の可能表現である。朱徳熙(1995)、劉月華(1980)によれば、「補語型」の可能表現は「能願動詞型」の可能表現と並列して、中国語の可能表現の中で重要な一部であると見られるけれども、本論文では、主に可能形式の一種としての能願動詞型である“能”、“会”、“可以”で表現される中国語の可能表現を研究対象として考察を展開していく。

² 「能願動詞」とは、情態動詞とも呼び、動詞の前に置く助動詞である。意味的には、可能や願望、義務、必要などを表す(『实用现代汉语语法』p.171)

³ 補語とは述語となる動詞や形容詞の後ろに置いて、述語の表す動作行為の結果や状況を補足説明する成分である。(『中国語わかる文法』p.115)

⁴ 補語の表す意味にしたがって類別すると、動作行為の結果を表す動詞または形容詞は結果補語、移動や方向を表す動詞は方向補語と呼ばれる。(『中国語わかる文法』p.116)

1. テンスと意味分類から見た日中語の可能表現の概観

前節でも述べたように、本論文では、テンスと意味の角度から、日本語と中国語の可能表現を対照する。まず、テンスの角度から見ると、日本語の可能表現は「可能」の意味を表すことができる以外、いわゆる「実現」の意味も表すことができるのが事実である。

(11) 私はサハ語でレポートが書ける。 「可能」

(12) 私はやっとサハ語でレポートが書けた。 「実現」

意味的には、例文(11)では動作主体が「レポートが書ける」という能力を持っていることを表し、例文(12)では動作主体が「レポートが書ける」という能力を過去に一回発揮した結果を表す。形式的に、例文(11)は可能形式の「現在未来形」で表現される一方、例文(12)は可能形式の「過去形」で表現される。

しかし、中国語の可能表現は日本語と同じような「実現」の意味を表すという機能が欠いている。

(13) 我会写小说。

(私 できる 書く 小説)

「私は小説が書ける」

(14) 我终于写完了小说。

(私 やっと 書く 終わる 了 1 小説)

「私はやっと小説が書けた」

例文(13)は可能形式としての“会”「できる」で、動作主体が「小説を書く」という能力を持っていること、つまり「可能」を表す。しかし、「実現」の意味を表すと、例文(14)が示すように、中国語は可能形式が生起できず、動詞“写”「書く」と結果補語“完”「終わる」の後ろに過去を表す“了”を後接することで表現される。つまり、日本語と中国語の可能表現は「実現」の意味を表すことができるかどうかという点で異なっているのが明確である。本論文ではこのような異なりを巡って、テンスの角度から考察と対照を展開していく。

一方、意味分類から見れば、日本語と中国語における可能表現の表す意味はそれぞれかなり多様であると言えることができる。例えば、動作主体の持つ能力が表す「能力可能」と動作主体の自分自身の一時的な状況によってある能力を一時的に発揮できるかどうかという意味を表す「内的な状況可能」などがある。

- (15) a. 彼はサハ語が話せる。
 b. 彼はサハ語を話すことができる。
 (16) a. 疲れているので、今は難しい本が読めない。
 b. 疲れているので、今は難しい本を読むことができない。

例文(15)は「能力可能」の例であり、例文(16)は「内的な状況可能」である。例文(15)、(16)から分かるように、二種類の可能形式はどちらも生起することができる。一方、中国語はどうであろうか。

- (17) 他 {会/可以/能} 说 萨哈语。
 (彼 できる 話す サハ語)
 「彼はサハ語が話せる」

- (18) 我的手指 受伤 了, 不 {*会/?可以/能} 写字。
 (私の 指先 怪我する 了) 否定 できない 書く 字)
 「私は指先をケガしていて字を書くことができない」

例文(17)では可能形式としての“能”、“会”、“可以”「できる」が全て「能力可能」の意味で生起でき、しかし例文(18)では「内的な状況可能」の意味で“能”「できる」のみ生起できることが分かる。

本論文では、日中語における可能表現の表す意味を詳しく分類した上で、肯定文と否定文という二つの角度から、日本語と中国語における可能表現形式の生起状況を明らかにする。2節では先行研究と問題点を記述する。3節ではテンスの角度から日中語における可能表現を対照する。4節では意味分類の角度から日中語における可能表現を対照する。5節は本発表のまとめである。

2. 先行研究と問題点

本節では、日本語と中国語における可能表現の意味に関する先行研究を概観し、問題点を提起する。

(i) 日中語における可能表現の意味分類に関する先行研究

金子(1980)では、意味的には可能表現(本論文の可能表現に相当する)を「ちからの可能」と「認識の可能」という二種類に分けて、「ちからの可能」を「“できる”の意味を問題にする可能」と定義し、「認識の可能」を「みこみの存在を問題にする可能」と定義する。さらに、金子(1981)では、「認識の可能」を「蓋然性可能」と呼び始めた。小矢野(1981:32)では、可能表現

の意味範疇について、「有情物の能力を表す可能から、可能性・蓋然性を表わす可能まで、その間に質的に異なるものを含むけれども、連続した表現形式として認めることができる」と指摘する。本論文では、先行研究を踏まえ、意味的に可能表現を「可能」と「蓋然性判断」という二種類に大きく分けることができると提唱する。ここでそれぞれの定義は以下のように提出する。

「可能」：動作主体(有情物或いは無情物)がある動作を成立させる力を有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことである。

「蓋然性判断」：話者が自分の判断に基づいて、事態の成立する見込みがあるかどうかを表すことである。

その上で、「可能」の意味分類については、宮崎(2020:10)では、「可能を条件づける要因として、能力と状況(条件)だけを取り上げるのは明らかに不十分であるし、大雑把すぎる」と指摘し、改めて可能を条件づける要因が動作主の内部にあるかどうかによって、「可能」を「内的な可能」と「外的な可能」に分けて、「外的な可能」をさらに「非デオンティックな可能」(束縛ではない可能)と「デオンティックな可能」(束縛がある可能)に下位分類した。渋谷(1993)では、可能であること条件によって、可能表現を「心理可能」、「能力可能」、「内的条件可能」、「外的条件可能」、「外的強制条件可能」、「蓋然性判断」に6つ分類した。本節では、主に宮崎(2020)と渋谷(1993)に従って、「可能」を「外的な可能」、「内的な可能」に分けて考察していく。

中国語の可能表現についての先行研究はほぼ能願動詞としての“能”、“会”、“可以”“できる”それぞれの意味に着目して記述するのが多い。その中に、代表的なのは黄麗華(1995)、朱德熙(1995)、侯瑞芬(2009)である。

黄麗華(1995)では、“能”：状況が一定のレベルにまで達する

“会”：ことがらがごく自然に成立する

“可以”：ことがらが許容範囲におさまる

朱德熙(1995)では、“能、会、可以”：行為主体の能力が、ある事態を達成できるか否かを言う

“会、能”：外界の可能性を言う

“能、可以”：状況としてあるいは道理として許可され得ることを表す

侯瑞芬(2009)⁵では、“能”：力と障害の二つの意味を備えており、主体が障害を克服する力を表す

“会”：主体が動作を実施している際に内的な力を強調する

“可以”：外的な障害の消失を強調する

先行研究で注目すべきなのは黄麗華(1995)が許容の意味も可能形式で表すことができると指摘したこと及び朱德熙(1995)が“会”と“能”がどちらも外界可能性も表すことのできると指摘することである。なお、朱德熙(1995)では、肯定文のみを考察するではなく、否定文と疑問文についても言及していた。本論文では、先行研究を踏まえ、可能表現を「肯定文」と「否定文」二つの角度から検討しながら、中国語の可能表現の意味及び各形式の生起状況を明らかにする。

(ii) 日中語における可能表現とテンスの関係に関する先行研究

「可能」と「実現」の角度から可能表現を論じる先行研究について、本節では主に渋谷(1993)と宮崎(2020)とを取り上げて紹介する。渋谷(1993:14)によれば、ある動作が実現することが含意するか否かによって、「可能」を「実現系可能」と「潜在系可能」という二種類に分けられる。さらに、「実現系可能」を「様々な条件によって、ある動作を実現することが可能、不可能である・あったことを表す」と定義し、「潜在系可能」を「様々な条件によって、ある動作を実現することがやる・やったかどうかは別にして、潜在的に可能、不可能である・あったことを表す」と定義する。

(19) 太郎はそのぐらいのレポートが書けた(「潜在系」)とは思っていたが、実際にやらせみたらやっぱり書けた(「実現系」) (渋谷 1993:14)

つまり、渋谷(1993)の観点から見れば、いわゆる「実現」は「実現系可能」と呼ばれ、「潜在系可能」と並列し、ただ単に「可能」の一部として捉えられるものである。

宮崎(2020:5)では、「可能と実現は、ポテンシャルかアクチュアルか(時間軸上に局在するか否か)という点で対立している」と指摘し、「可能」と「実現」を区別する。さらに注目すべきなのは、宮崎(2020:5)が「可能」と「実現」の間に中間的な意味分類が存在すると指摘し、その意味分類を「アクチュアルな可能」と呼ぶ。

⁵ 侯瑞芬(2009:270)の原文は「“能”兼有力量与障碍两种语义，表示主体克服障碍的能力，“会”强调主体实施行为的内在力量，“可以”强调外在障碍的消失」である。本文の日本語は筆者が訳したものである。

(20) そのとき、僕は歌詞を覚えていたので、その曲を歌えた。 (宮崎 2020:5)

宮崎(2020:5)はこの文について、「実現の意味にもとれるが、可能の意味にもとれる(「歌うことが可能であった」という意味)。そして、この文が可能の意味になるときは、可能でありながら、アクチュアルである」と指摘する。つまり、宮崎(2020)では、いわゆる「実現」が「アクチュアルな可能」を橋渡しにし、「可能」と対立しているものであると考えている。

よって、渋谷(1993)と宮崎(2020)との観点を総合して、本論文の立場を述べる。まず、宮崎(2020)での「可能」と「実現」の間に「アクチュアルな可能」という中間の意味分類が存在するという点を賛成の立場に立つ。しかし、「可能」と「実現」が対立していることよりも、渋谷(1993)で指摘するように、いわゆる「実現」の表す「実現系可能」が「潜在系可能」と並列し、あくまで「可能」の範疇の中に議論されているものであることのほうが賛成である。故に、本論文では、「可能」には「潜在可能」、「現実可能」、「実現可能」という三つの下位分類があると主張する。それぞれの定義と例文は以下のようになる。

「潜在可能」: 動作主体がある特性としての動作を成立させる力を有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことを表す。

「現実可能」: 動作主体がある具体的な現象としての動作を成立させる力を一時的に有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことを表す。

「実現可能」: 動作主体がある具体的な現象としての動作を成立させる力を一回発動した・しなかったという結果を表す。

(21) 私は泳げない。 「潜在可能」

(22) 私は疲れているから、泳げない。 「現実可能」

(23) 昨日、私は初めて 300m 泳げた。 「実現可能」

テンスの先行研究について、本節では主に日本語記述文法研究会(2007)を取り上げる。日本語記述文法研究会(2007)では、テンスとは文が表す事態を時間軸上に位置付ける述語の文法カテゴリーである。意味的にはテンスは述語の形態あるいは副詞的成分によって、「過去」、「現在」、「未来」という時間的な意味を表す。発話時より後に事態を位置づけるのが「未来」、発話時と同時に事態を位置づけるのが「現在」、発話時より前に事態を位置づけるのが「過去」である。また日本語の可能表現のテンスについての研究では、小矢野(1978)では形式的に可能表現が過去形意味分類と現在未来形意味分類に分けられ、さらに意味的には可能表現がテンスに位置付けられる「時間的な表現」とテンスから解放される「超時間的な表現」という二つの

種類に分けられると指摘した。本発表では先行研究を踏まえ、「過去」、「現在」、「未来」、「超時間」という4つのテンス区分から日中語における可能表現を考察してみる。

(iii) 日本語と中国語における可能表現の対照に関する先行研究

李娜(2019)では、平叙文と疑問文から、日本語と中国語における可能形式と述語動詞との共起状況を考察する。結論としては、「能力可能」と「条件可能」の意味について、中国語も日本語と類似し、「意志性」の制約が強く働く傾向がみられたと指摘した。また、“会”は「意志動詞:習得不要動作⁶」と共起できないとも指摘するが。この点について、以下の反例があると考えられる。

(24) 我们 生来 就 {会/*可以/*能} 哭 (侯瑞芬 2009:4)
 (私達 生まれつき 強調 できる 泣く)
 「私達は生まれながらにして、泣くことができる」

“哭”「泣く」が生まれつきの動作なので、「習得不要動作」に属されるべきであると考えられる。しかし、例文(24)が示すように、“会”「できる」が「習得不要動作」としての“哭”「泣く」と共起してもこの文が不自然になると感じられない。よって、李娜(2019)で指摘する“会”の生起状況はさらに検討する余地があると考ええる。

また、呉志寧(2016)では、可能表現を「潜在可能文」と「可能の顕在化文」という二種類に分け、さらに日本語の「潜在可能文」を「ル形」と「タ形」に分けて、中国語と対照する。結論としては、「潜在可能文のル形には中国語の可能表現が対応できるが、タ形は全ての中国語の可能表現が使えるというわけではない…(中略)…日本語の可能の顕在化文は中国語の可能表現が対応できない」と指摘する。しかし、呉志寧(2016)では、「過去」を表すタ形の「可能の顕在化文」しか検討していないが、実際、「現在」における「可能の顕在化文」もあると考えられる。例えば、

(25) (泳いでいる最中に) どうだい、ちゃんと泳げているだろう？ (渋谷 1993:17)

例文(25)は、可能形式の進行形「泳げている」で提示され、話者が発話している同時に、動作主体が「泳げる」という能力を発揮している姿を目に映っているという「現在」における「可能の顕在化文」であろう。しかし、このような「可能の顕在化文」が呉志寧(2016)で言及しな

⁶ 李娜(2019:21)では、「習得不要動作」とは、「動作主の生まれつきの能力があり、動作主がその能力を使用して行う動作である。一般的には一回習得できたら恒常の能力になると思われる」と指摘した。

い。つまり呉志寧(2016)で指摘する「可能の顕在化文」の種類がさらに討論する余地があると考える。

3. テンスから見た日本語と中国語における可能表現の対照

本節では、「過去」、「現在」、「未来」、「超時間」という四つのテンス区分から、日中語における可能表現としての「潜在可能」、「現実可能」、「実現可能」を考察し、それぞれの共通点と相違点を考察する。

3.1 テンスから見た日中語における「潜在可能」の対照

本節では、日本語と中国語における「潜在可能」を考察する。2節で述べてきたように、「潜在可能」とは「動作主体がある特性としての動作を成立させる力を有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことを表す」である。また、テンスから見れば、「潜在可能」には、「過去」における「潜在可能」と「超時間」における「潜在可能」という二種類がある。まず、「過去」における「潜在可能」を見よう。

3.1.1 日中語における「過去」の「潜在可能」の対照

「過去」の「潜在可能」は、動作主体のある特性としての動作を成立させる力を発話時の前に、有した・有しなかったことを表す。日本語の例を見よう。

(26) 私には耳にした曲なら何でも弾くことができた。

(27) むかしはどんなむずかしい字でも書けた。

(渋谷 1993:16)

(28) こどもの頃はいくらでも泳ぐことができた。

(宮崎 2020:6)

これらの三つの例文は全て「過去」における「潜在可能」を表す可能表現であり、動作主体の「弾ける」、「書ける」、「泳げる」という特性としての能力を発話時の前に有したことを表す。形式から見ると、日本語は「弾くことができた」、「書けた」、「泳ぐことができた」のような可能形式の「過去形」によって「過去」の意味を表現される。一方、中国語の例を見よう。

(29) 以前 我 会 说 萨哈语。

(昔 私 できる 話す サハ語)

「昔、私はサハ語が話せた」

- (30) 以前 的 学生 看 电影 可以 享受 学生 优惠
 (以前 の 学生 観る 映画 できる 楽しむ 学生 割引)
 「以前の学生は割引料金で映画を観ることができた」 (宮崎 2020:6)

- (31) 过去、人们 不 能 随意 出国
 (昔 みんな 否定 できる 自由に 出国する)
 「昔、みんなは自由に出国することができなかった」

例文(29)、(30)、(31)は、全て「過去」における「潜在可能」を表す中国語の可能表現である。これらの例文では発話時の前に、動作主体がある「話せる」、「観ることができる」、「出国することができる」という特性としての能力を有したか否かを表す。形式から見ると、中国語は“以前”「以前」、「過去」「昔」など「過去」の意味を表す時間副詞で提示され、「過去」の意味を表現する。また、否定文は“不”「ない」を可能形式の前に生起することで表現される。

3.1.2 日中語における「超時間」の「潜在可能」の対照

つづいて、「潜在可能」には「超時間」における「潜在可能」のタイプがある。「超時間」における「潜在可能」とは、動作主体のある特性としての動作を成立させる力が時間から解放され、その力を恒常的に有する・有しないということである。

- (32) ペンギンは{*昔/*今/*将来}空を飛べない動物だ。
 (33) (毒でないから)この茸は{*昔/*今/*将来}食べられる。
 (34) 水 和 油 {*以前/*現在/*未来} 不 能 相 融。
 (水 と 油 *昔/*今/*将来 否定 できる お互い 混ぜる)
 「水と油を混ぜることはできない」
 (35) 老虎 {*以前/*現在/*未来} 不 会 下 蛋。
 (虎 *昔/*今/*将来 否定 できる 産む 卵)
 「虎は卵が産めない動物だ」

例文(32)、(33)が示したように、日本語においてこの場合では、「昔」、「今」、「将来」など時間を提示する時間副詞が生起すると、非文になる。また、たとえ「超時間」の意味を表したとしても、日本語は「現在」或いは「未来」を表す「現在未来形」で表現せざるを得ない。一方、中国語では、(34)、(35)が示すように日本語と同じく、可能形式が生起できるが、時間を提示

する時間副詞が生起しにくいと考えられる。また、否定文は“不”「ない」が可能形式の前に生起することで表現される。

本節の内容は以下の表[1]のようにまとめられる。

表[1] 日中両言語における可能表現の「潜在可能」の対照

	日本語	中国語
過去	可能形式の「過去形」	時間副詞＋可能形式
超時間	可能形式の「現在未来形」	可能形式

表[1]が示すように、「潜在可能」には「過去」と「超時間」という二種類がある。形式から見ると、日本語において、「過去」の「潜在可能」は可能形式の「過去形」で表現され、「超時間」の「潜在可能」は可能形式の「現在未来形」で表現される。一方、中国語において、「過去」の「潜在可能」は「過去」を表す時間副詞で提示されなければならない、「超時間」の「潜在可能」には時間副詞が生起不可である。また、否定文は否定詞“不”で否定の意味を提示される。

3.2 テンスから見た日中語における「現実可能」の対照

2節で述べてきたように、「現実可能」とは「動作主体がある具体的な現象としての動作を成立させる力を一時的に有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことを表す」ということである。「現実可能」には「過去」、「現在」、「未来」という三つの下位分類があるので、まず、「過去」における「現実可能」を考察する。

3.2.1 日中語における「過去」の「現実可能」の対照

「過去」における「現実可能」について、宮崎(2020:6-7)では、「実現しなかったということが前提(共有情報)となっている場合は、実現しなかったが可能ではあったという意味のアクチュアルな可能になる。…(中略)…状況的に可能であった(否定の場合は不可能だった)」という意味のアクチュアルな可能もある」と指摘した。なお、宮崎(2020:6-7)が言及したアクチュアルな可能は本節の「現実可能」に相当する。

つまり、「過去」における「現実可能」はあくまで発話時の前に、動作主体がある具体的な動作を成立させる力を実際に発動したかどうかには言及せず、ただ単に動作主体がその具体的な動作を成立させる力を一時的に有したかどうかを述べるだけである。

(36)私はそのとき出かけることもできた。

(宮崎 2014:51)

- (37) 太郎はその時レポートが書けたはずだ(実際に書いたかどうかは知らないが)
(渋谷 1993:14)
- (38) 「あのとき、谷口さん、私たちのことを撃とうと思えば、撃てたのに…」
(宮崎 2020:7)
- (39) 花子は、十分逃げられた。(結局、逃げなかった) (呉志寧 2016:75)

これらの例文は全て「過去」における「現実可能」を表す可能表現である。話者の発話する重点は、結局動作を成立させる力が実行になったかどうかということではなく、動作主体がある特定の時点で具体的な動作としての「出かける」、「書く」、「撃つ」、「逃げる」を成立させる力を確かに持っていたということであろう。また、形式から見ると、日本語は可能形式の「過去形」で表現される。なお、宮崎(2020:7)によれば、この場合では、「も」によるとりたて、「しようと思えば」という副詞句、「～はずだ」、「～のに」などが「現実可能」であることを明示する言語的な手段として働かなければならない。一方、中国語の例文を見よう。

- (40) 当时 他 明明 可以 从 窗户 逃跑
(あの時 彼 のに できる から 窓 逃げる)
「あの時、彼は窓から逃げられたのに」
- (41) 那时 太郎 是 能 求婚 的
(あの時 太郎 語気副詞 できる プロポーズする 語気副詞)
「あの時、太郎はプロポーズできたのに」 (呉志寧 2016:75)
- (42) 明明 昨天 的 会议 原则 上 不 能 说 中文。
(のに 昨日 の 会議 原則 上 否定 できる 話す 中国語)
「昨日の会議では原則的に中国語を話すことができなかったのに」

例文(40)、(41)、(42)から見ると、中国語において、可能形式がこの場合で生起でき、「過去」を提示する時間副詞も可能形式と共起しなければならない。そして、この場合では“明明”「のに」「是…的」によるとりたてなど「現実可能」であることを明示する手段も必要であると考えられる。なお、この場合では、否定文において“不”「否定」が可能形式の前に生起することで表現される。

3.2.2 日中語における「現在」の「現実可能」の対照

「現在」における「現実可能」とは、話者が発話している同時に、動作主体がある具体的な

動作を実現させる力を有しているかどうかを表すということである。

(43) このハトはけがをしているので、今は飛べない。 (小矢野 1978:89)

(44) 私、疲れているから泳げない。

(45) 我的手指受伤了，不能写字了。

(私の指先 怪我する 了₁ 否定 できない 書く 字 了₂)

「私は指先をケガして字を書くことができない」

(46) 我的腿现在不疼了，可以游泳了。

(私の足 今 否定 痛い 了₁ できる 泳ぐ 了₂)

「私は足の痛みが無くなったから、泳げるようになった」

これらの例文は「飛ぶ」、「泳ぐ」という動作を実際に行っているかどうかに関わらず、ただ単に動作主体がそれらの動作を成立させる力を持っているかどうかということだけを表している。形式から見ると、例文(43)、(44)が示すように、日本語では、この場合で可能形式の「現在未来形」で表現される。一方、例文(45)、(46)が示すように、中国語では、可能形式が生起でき、否定文は、“不”が可能形式の前に生起することで表現される。また、この場合では、「現在」を表す時間副詞が生起する必要がないと考えられる。

3.2.3 日中語における「未来」の「現実可能」の対照

「現在」における「現実可能」とは、話者が発話した後、動作主体がある具体的な動作を実現させる力を有するかどうかを表すということである。

(47) 明日は休みだからどこでも好きなところに行ける。 (渋谷 1993:20)

(48) 来週は用事があるから大学に行くことができない。 (渋谷 1993:24)

(49) 下周开始就变忙了，不能写信了

(来週 始まる 順接 なる 忙しい 了₂ 否定 できる 書く 手紙 了₂)

「来週から忙しくなるから、手紙が書けない」

(50) 明天没有加班，五点就可以下班

(明日 否定 残業 5時 順接 できる 退勤する)

「明日は残業がないので、帰ろうと思えば、5時に帰れる」

例文(47)、(48)が示すように、日本語は、この場合で可能形式の「現在未来形」で表現される。一方、例文(49)、(50)が示すように、中国語では、可能形式が生起でき、否定文は、“不”が可能形式の前に生起することで表現される。また、この場合では、「未来」を表す時間副詞“下周”「来週」、「明天」「明日」が生起しなければならない。本節のまとめは以下の表[2]のようになる。

表 [2] 日中両言語における可能表現の「現実可能」の対照

	日本語	中国語
過去	可能形式の「過去形」	時間副詞＋可能形式
現在	可能形式の「現在未来形」	可能形式
未来	可能形式の「現在未来形」	時間副詞＋可能形式

表[2]が示すように、日本語において、「過去」の「現実可能」は可能形式の「過去形」で表現し、「現在」と「未来」との「現実可能」は両方とも可能形式の「現在未来形」で表現される。一方、中国語において、全ての「現実可能」は可能形式で表現されることが可能であるが、「過去」或いは「未来」の意味を表す場合、さらに時間副詞が生起しなければならない。否定文には否定詞“不”が「否定」の意味を提示する。

3.3 テンスから見た日中語における「実現可能」の対照

3.2 節では、動作主体が現実性のある力を一時的に持っているかどうかという意味を表す「現実可能」を考察した。本節から、「実現可能」についての考察を行なっていく。「実現可能」とは、「動作主体がある具体的な現象としての動作を成立させる力を一回発動した・しなかったという結果を表す」ことである。本発表では、「過去」、「現在」という二つの角度から考察を行う。まず、「過去」の「実現可能」に入ろう。

3.3.1 日中語における「過去」の「実現可能」の対照

「過去」の「実現可能」は発話時の前に、動作主体がある具体的な現象としての動作を成立させる力を一回発動した・しなかったという結果を表す。まず、日本語の例を見よう。

(51) 昨日久々に手紙が書けた。

(渋谷 1993:15)

(52) 君の言った本は借りることができた。

(楊明 2004:283)

(53) 結局、彼は窓から逃げられなかった。

例文(51)、(52)では、動作主体が発話時の前に、「書ける」、「借りることができる」という能力を発動し、「書く」、「借りる」という動作が思い通りに実行になったということを表し、否定文の例文(53)では、「逃げられる」という能力がその時にあったかどうかに関わらず、話者の中心は動作主体の「逃げる」という動作が結局実行に移さなかったということである。このような話者の重点は前ほど言及していた「現実可能」とかなり異なっていると考えられる。なお、宮崎(2020)が形式的特徴に基づいて、「実現可能」と「現実可能」も区別してきた。宮崎(2020:7)では、「過去の動作の場合、実現の意味が無標的、アクチュアルな可能を表すには、文脈の支えが必要である」と指摘する。一方、中国語の例を見よう。

(54) 我 终于 写 完 了 小说。

(私 やっと 書く 終わる 了「小説」)

「私はやっと小説が書けた」

(55) 我 已经 认 出 了 犯人。

(私 もう 識別する 出る 了「犯人」)

「私はもう犯人を識別できた」

(56) 昨天 太 忙 了, 没 吃 成 北京烤鸭。

(昨日 とても 忙しい 了「否定 食べる 成功する 北京ダック」)

「昨日忙しかったから、北京ダックを食べられなかった」

(57) 上次 我 没 治 好 他的 病。

(前回 私 否定 治す 良い 彼の 病気)

「私は前回彼の病気を治せなかった」

例文(54)、(55)が示すように、中国語では、「過去」の「実現可能」を表す場合、可能形式が生起できず、代わりに「動詞+補語⁷+了」 という形式で表現される。また、否定文の(56)、(57)では、「潜在可能」と「現実可能」と異なり、「否定」の意味を表す否定詞は“不”ではなく“没”であり、つまり否定文は「“没”+動詞+補語」という形式によって表現される。故に、中国語の可能表現は過去の「実現可能」を表すという機能が欠いていると考えられる。

⁷ ここでの補語には主に「結果補語」と「方向補語」という二種類がある。

3.3.2 日中語における「現在」の「実現可能」の対照

「現在」の実現可能は発話時の同時に動作主体のある具体的な現象としての動作を成立させる力が発動されており、その動作が実行に移している姿を表す。日本語の例文は以下のようになる。

- (58) あの子どもは上手に泳げている。 (宮崎 2020:8)
 (59) (泳んでいる最中に) どうだい、ちゃんと泳げているだろう? (渋谷 1993:17)
 (60) 君にはまだ女心というものが理解できていない。 (渋谷 1993:17)

これらの例文から見ると、日本語では、話者が動作主体の能力を実現している・していない姿を目に映っていることを表す場合、可能形式+「ている」、つまり可能形式の進行形で表現される。一方、中国語の例を見よう。

- (61) 看，小王 可以用日语很好地交流啊。
 (ほら 王さん できる 使う 日本語 良い 副詞化 話し合う 語気副詞)
 「ほら、王さんってちゃんと日本語で話せているね」

- (62) 我 现在 还是 不能 理解 她的 做法
 (私 今 まだ 否定 できる 理解する 彼女の やり方)
 「私には彼女のやり方がまだ理解できていない」

例文 (61)、(62) が示すように、中国語において、可能形式がこの場合で生起できる。否定文のほうは“不”が生起し、「否定」の意味を表す。まだこの場合では、“看”、“现在”など「現在」の意味を表す時間副詞が生起しなくても意味は変わらないと考えられる。

本節のまとめは以下の表[3]のようになる。

表 [3] 日中両言語における可能表現の「実現可能」の対照

	日本語	中国語
過去	可能形式の「過去形」	動詞+補語+“了 ₁ ” “没”+動詞+補語
現在	可能形式の「進行形」	可能形式

表[3]が示すように、日本語において、「過去」の「実現可能」は可能形式の「過去形」で表

現され、「過去」の「実現可能」は可能形式の「進行形」によって表現される。一方、中国語において、「過去」の「実現可能」は可能表現で表現できず、代わりに「動詞＋補語＋了」 という形式で表現される。さらに「過去」の「実現可能」の否定文は否定詞が特殊であり、“不”ではなく“没”「否定」によって提示される。

4. テンスから見た日本語と中国語における可能表現の対照

第3節では、テンスの角度から、日本語と中国語における可能表現を対照した。本節では、視点を意味分類へ移し、日中語の可能表現についての考察を再展開していく。意味分類の角度から見れば、可能表現は「可能」と「蓋然性判断」に分けられ、さらに「可能」は「内的な可能」と「外的な可能」に下位分類することができる。まず、「可能」の「内的な可能」を考察してみよう。

4.1 日中語における可能表現の「内的な可能」の対照

本節では、日本語と中国語における可能表現の「内的な可能」を考察する。「内的な可能」とは動作主体が自身の内部の要因によって、ある動作を成立させる力を有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことである。また、「内的な可能」には、「能力可能」と「内的な状況可能」という二つの下位分類が入っている。まず、「能力可能」を見よう。

4.1.1 日中語における「能力可能」の対照

「能力可能」とは、動作主体(有情物或いは無情物)が自身の持つ能力により、ある動作・状態を成立させるポテンシャルな力である。侯瑞芬(2009)、宮崎(2020)での「能力可能」についての考察にしたがって、本発表では「能力可能」を「動作主体が有情物である場合」、「動作主体が無情物である場合」という二つの場合に分けて考察してみることにする。また、本論文では、動作主体が述語にある動作を行う主体であると定義し、それに対して対象が動作を行う対象であると定義する。

動作主体が有情物である場合には、有情物のある能力があるかないかを有情物の「能力の有無」と呼ぶ。また、毛利(1980)によれば、「能力」を「先天的能力」と「後天的能力」に下位分類することができる。まず日本語の例を見よう。

- (63) a. 私はサハ語が話せる。 (後天的能力)
b. 私はサハ語を話すことができる。
- (64) a. 私は酒が飲めない。 (先天的能力)
b. 私は酒を飲むことができない。

例文(63)は後天的能を有する例であり、「サハ語が話せる」という能力について母語がサハ語ではない「私」に対して、わざわざ練習しなければ身につけられないことを表す。(64)は先天的能力の無しの例であり、「酒が飲める」という誰でも身につけられる能力が「私」の体質の原因などによって、個人的に生まれつきからずっと持っていないことを表す。(63)、(64)が示すように、日本語における動作主体が有情物である場合、「能力の有無」は「動詞の可能形」と「(ことが)できる」という二つの可能形式どちらも表すことができる⁸。一方、中国語の例文を見よう。

- (65)a. 我 {会/可以/能} 游泳。
 (私 できる 泳ぐ)
 「私は泳げる」 (後天的能力)
- b. 我 不 {会/*可以/能} 游泳。
 (私 否定 できる 泳ぐ)
 「私は泳げない」
- (66) 我们 生来 就 {会/*可以/*能} 哭 (侯瑞芬 2009:4)
 (私達 生まれつき 順接 できる 泣く)
 「私達は生まれながらにして泣くことができる」 (先天的能力)
- (67) 老鼠 生下来 {会/*可以/*能} 打 洞。 (大江 2015:54)
 (ネズミ 生まれつき できる 掘る 穴)
 「ネズミは生まれながらにして穴を掘ることができる」 (先天的能力)

例文(65)では、有情物の習得しなければならない後天的な能力の有無を表す際には、中国語では、肯定文に“能”、“会”、“可以”「できる」のいずれも生起できる。否定文には“可以”「できる」が生起すると意味的には「泳いではいけない」になる。例文(66)、(67)が示すように、有情物の自足性がある先天的能力の有無を表すことができるのは、“会”「できる」のみである⁹。

また、侯瑞芬(2009)によると、中国語では、動作主体としての有情物の能力に対する語用論

⁸ 渋谷(1995:120)では、文法的な使い分けがないけれども、「動詞の可能形」のほうが「(ことが)できる」よりインフォーマルで、日常会話でよく使われているということであろうと指摘した。

⁹ 侯瑞芬(2009:277)は、“会”には「自足性」があるから、わざわざ学ばなくても身に付けられる(つまり、生まれつきの能力)を表すことができると指摘した。

的評価を表す可能文がある。本発表ではこの意味意味を有情物に対する「語用論的評価」と呼ぶ。以下の例を見よう。

(68) a. 他 会 买 东西。 (大江 2015:62 より改変)
(彼 できる 買う もの)
「彼は買い物上手だ」

b. 他 能 买 东西。
(彼 できる 買う もの)
「彼はたくさん買い物をする」

(69) a. 他 会 吃。 (大江 2015:62 より改変)
(彼 できる 食べる)
「彼はグルメだ」

b. 他 能 吃。
(彼 できる 食べる)
「彼はよく食べる」

例文(68)、(69)は、ただ単に動作主体としての有情物がある日常的な動作を実現させる力を有することを言うのではなく、その日常的な動作を実現させる力に対する語用論的評価を下していると考えられる。また、能願動詞が表す意味はそれぞれ違っている。(68a)、(69a)では、“会”「できる」を使って、「買い物の技術の質の高さ」、「食べ方の質の高さ」のような動作主体の「動作の質の高さ」を強調する。(68b)、(69b)では、“能”「できる」を使って、「買い物をする量の多さ」、「食べる量の多さ」のような「動作の量の多さ」を強調する。しかし、“可以”「できる」はこの場合では使えない。なお、この意味を表す場合には、“特別”「特に」、「很」「とても」などどの程度の高さを表す程度副詞¹⁰が中国語の“能”、“会”「できる」という可能形式と共起することが多い。

しかし、日本語では、動作主体としての有情物に対する「語用論的評価」は可能表現で表現することができない。

¹⁰ 劉月華(2001:209)では、中国語における“副詞”「副詞」は動詞、形容詞の前に生起し、修飾、限定の役割をもつものであり、“程度副詞”「程度副詞」は被修飾語の表す動作、性質などの程度を示す副詞であると指摘した。

(70)*a. 彼は買い物することができる。

*b. 彼は物を買える。

(71)*a. 彼は食べることができる。

*b. 彼は食べられる。

例文(70)、(71)が示すように、日本語では、二つの可能形式が動作主体としての「彼」の能力しか表すことができず、動作主体の能力に対するプラス評価が含意していない。この点はやはり中国語と日本語が大きく異なる点であると考えられる。

また、動作主体が有情物である場合には、有情物のある能力がどの程度まで身に付けられるのかを有情物の「能力の様態」と呼ぶ。まず、日本語の例を見よう。

(72)私は海で10メートル以上はもぐれる。

(73)私は30キロ以上のものは持ち上げることができない。(渋谷 1993:35)

例文(72)、(73)が示すように、有情物の「能力の様態」を表す際には、「動詞の可能形」と「(ことができる)」どちらでも表すことができる。一方、中国語の例を見よう。

(74)我 {*会/可以/能} 一小时 打 一千多 个字。

(私 できる 一時間 入力する 千 余り 量詞 字)

「私は一時間に千字余りを入力することができる」

(75)我 一口气 不 {*会/*可以/能} 游 500m。

(私 一息で 否定 できる 泳ぐ 500メートル)

「私は一息で500メートル泳げない」

例文(74)、(75)が示すように、「能力の様態」を表す場合では、中国語において肯定文には“能”、“可以”「できる」がどちらも自然である一方、“会”「できる」は生起できない。また、否定文には、“能”「できる」が一番自然であるけれども、“可以”「できる」を使うと「泳ぐべきではない」、「泳いではいけない」という意味になると感じられる。“会”「できる」は生起できない。

しかし、動作主体は必ずしも有情物であるとは限らなく、無情物も可能である。動作主体が無情物である場合では、無情物のある恒常的な能力を表す。以下の例を見よう。

(76)a. この車は400メートル12秒で走ることができる。(渋谷 1993:8)

b. この車は400メートル12秒で走れる。

- (77) a. この花は2回花を咲かせることができる。 (渋谷 1993:8)
b. この花は2回花を咲かせられる。

例文(76)、(77)が示すように、「車」、「花」のような無情物の能力を表す際には、「ことができる」、「動詞の可能形」は両方とも生起することができると考えられる。一方、中国語の例を見よう。

- (78) a. 那个 桥 {*会/可以/能} 承载 10吨 以上 的 重量。
(あの 橋 できる 支える 10トン 以上 の 重さ)
「あの橋は10トン以上の重さを支えることができる」
b. 那个 桥 不 {*会/*可以/能} 承载 10吨 以上 的 重量。
(あの 橋 否定 できる 支える 10トン 以上 の 重さ)
「あの橋は10トン以上の重さを支えることができない」

- (79) a. 那个 潜水艇 {*会/可以/能} 潜 到 5000米 以下。
(その 潜水艦 できる 潜る 至る 5000メートル 以上)
「その潜水艦は5000メートル以上は潜ることができる」
b. 那个 潜水艇 不 {*会/*可以/能} 潜 到 5000米 以下。
(その 潜水艦 否定 できる 潜る 至る 5000メートル 以上)
「その潜水艦は5000メートル以上は潜ることができない」

例文(78)、(79)が示すように、動作主体が無情物である場合では、肯定文にと否定文にはいずれも“会”“できる”が生起できない。また、“可以”“できる”は否定文に生起すると、「してはいけない」という意味を表すと考えられる。“能”“できる”はいずれも生起できる。

4.1.2 日中語における「内的状況可能」の対照

つづいて、「内的な状況可能」とは、動作主体としての有情物のある能力の有無のことを前提として、「体調」、「気分」など肉体の中の一時的な状況によって、その能力を一時的に得る・失う(もしくは強くなる・弱くなる)ことである。日本語の例を見よう。

- (80) 疲れているので、今は難しい本を読むことができない。 (宮崎 2020:10)
(81) 今日はいつもより飲める。 (小矢野 1979:89)

(82) このハトはけがをしているので、今は飛べない。 (小矢野 1979:89)

例文(80)、(81)、(82)が示すように、この場合では、「可能形」と「(ことが)できる」どちらも生起できる。一方、中国語の例は以下ようになる。

(83) 我的腿不疼了, {*会/可以/能} 游泳了。
 (私の足否定痛いた₁ できる 泳ぐ了₁₊₂)
 「私は足の痛みが無くなったから、泳げるようになった」

(84) 我的手指受伤了, 不 {*会/?可以/能} 写字。
 (私の指先怪我する₁ 否定 できない 書く字)
 「私は指先をケガしていて字を書くことができない」

例文(83)、(84)が示すように、動作主体は体調などの内的な状況によって、動作を一時的に実現することが可能である(もしくは不可能である)。この場合では、肯定文には“会”“できる”が生起できない。否定文には“会”が生起できず、“能”のみが生起でき、もし“可以”“できる”を用いると「してはいけない」という意味になると考えられる。

本節の内容は以下の表 [4] のようにまとめられる。

表 [4] 日中両言語の「内的な可能」による可能表現の対照¹¹

		中国語			日本語		
		能	会	可以	可能形	(ことが)できる	
能力可能	動作主体が有情物である場合	先天的能力の有無	×	○	×	○	
		後天的能力の有無	○	○	△	○	
		語用論的評価	質の高さ	×	○	×	×
			量の多さ	○	×	×	×
	能力の様態	○	×	△	○	○	
	動作主体が無情物である場合	○	×	△	○	○	
内的状況可能		○	×	△	○	○	

¹¹ 「○」は肯定文と否定文いずれにも生起できることを表す。「×」は肯定文と否定文のいずれにも生起できないことを表す。「△」は肯定文のみに使えることを表す。

表 [4] が示すように、「内的な可能」による可能表現を表す場合、中国語では“能”は適用性が一番広く、「先天的能力の有無」、有情物に対する「語用論的評価」の「質の高さ」に生起できず、“会”は有情物に対する「語用論的評価」の「量の多さ」、「能力の様態」、「動作主体が無情物である場合」、「内的状況可能」に生起できず、“可以”は「先天的能力の有無」、有情物に対する「語用論的評価」に生起できない。それに“可以”はいずれも否定文に生起できない。日本語では、「可能形」と「(ことが)できる」は両方とも有情物に対する「語用論的評価」以外の意味に生起することができる。

4.2 日中語における可能表現の「外的な可能」の対照

本節では、日本語と中国語における可能表現の「外的な可能」を考察する。「外的な可能」とは動作主体が自身以外の外部の要因によって、ある動作を成立させる力を有する・有しない(もしくは有した・有しなかった)ことである。本論文では、「外的な可能」を「外的な状況可能」、「無情物の属性可能」、「束縛的可能」に分けた。まず、「外的な状況可能」を見よう。

4.2.1 日中語における「外的状況可能」の対照

「外的状況可能」とは、動作主体としての有情物のある能力の有無のことを前提として、自身以外の外部の何か一時的な影響を受け、その能力を一時的に得る・失う(もしくは強くなる・弱くなる)ことである。日本語の例は以下のようになる。

(85)ライターを持っていないから、タバコを吸うことができない。 (宮崎 2020:10)

(86)明日休みなので、映画を見られる。 (宮崎 2020:9)

(87)明日は用事があるから大学に行くことができない。 (渋谷 1993:36)

例文(85)、(86)、(87)では動作主体の自身以外の外部の一時的な状況に関わる要因によって、能力が実現できる／できないことを表す。また、「動詞の可能形」と「(ことが)できる」という二つの可能形式がこの場合でどちらも生起することができる。一方、中国語の例を見よう。

(88)我 明天 有 课, 不 {*会/*可以/能} 去 游乐园 了。

(私 明日 ある 用事 否定 できる 行く 遊園地 了₁₊₂)

「私、明日授業があるから、遊園地に行くことができない」

(89)今天 没有 事, 我 {*会/可以/能} 参加 那 个 会议。

(今日 否定 事 私 できる 参加する それ 量詞 会議)

「今日は用事がないので、その会議に参加できる」 (大江 2015:44)

例文(88)、(89)から見ると、肯定文には“能”、“可以”「できる」がどちらも生起できる。否定文には“能”「できる」を用いると一番自然であり、“可以”「できる」を使うと、「してはいけない」の意味になる。また、この場合では、“会”「できる」は生起できない。

4.2.2 日中語における「無情物の属性可能」の対照

つづいて、「無情物の属性可能」には、「属性の有無」と無情物に対する「語用論的評価」という二つの下位分類がある。無情物の「属性の有無」とは、動作主体のある能力の有無のことを前提として、自身以外の外部の無情物の恒常的な属性によって、その能力が一時的に実現できる／できないということである。

(90) このきのこは(毒があるから)食べられない。 (渋谷 1993:20)

(91) セロリの葉も食べることができる。

(92) この着物は小さくなったのでもう着られない。 (渋谷 1993:28)

例文(90)、(91)、(92)が示すように、日本語では「動詞の可能形」と「(ことが)できる」という可能形式どちらも生起できる。また、これらの例文は主語の恒常的な能力(属性)を表している点では、3節の「能力可能」と同様であるけれども、しかし意味から見ると、これらの例文の主語が動作主体ではなく、対象であるという点で主語が動作主体である「能力可能」と異なっていると考えられる。つまり、例文(90)を代表として説明すると、例文(90)は「毒があるから、人間はこのきのこを食べることができない」という文に置き換えると意味が変わらないと考える。一方、中国語の例を見よう。

(93) 棉花 {*会/可以/能} 织 布。

(コットン できる 織る 布)

「コットンは布を織ることができる」

(94) 这个 蘑菇 (有 毒) 不 {*会/*可以/能} 吃。

(このきのこ ある 毒 否定 できる 食べる)

「このきのこは(毒があるから)食べられない」

例文(93)、(94)が示すように、肯定文にと否定文にはいずれも“能”が生起できるのに対して、“会”「できる」がこの場合ではいずれも生起できない。また、“可以”「できる」は肯定文のみに生起できる。

また、無情物に対する「語用論的評価」とは、話者が対象としての無情物の属性に対するプラスあるいはマイナスの評価である。日本語の例は以下のようになる。

(95)a. あのレストランの飯は喰える。 (「うまい」の意) (久野 1983:149)

*b. あのレストランの飯は喰うことができる。

(96)a. この映画はとても見られたもんじゃない。 (「退屈」の意) (渋谷 1993:22)

*b. この映画はとても見るができないもんじゃない。

例文(95)、(96)の表す意味は対象としての無情物の持っている属性を有していることよりも、話者が対象としての無情物に対するプラス若しくはマイナスの語用論的評価を述べているという解釈が優先的に出てくるのだろう。また、この場合では、「できない」が生起できない。なお、渋谷(1993:26)によると、このような評価の意味を表す可能文は生産性を持たないと指摘した。一方、中国語の例を見よう。

(97)a. 那个 餐厅 的 饭 {*会/*可以/*能} 吃。

(あの レストラン の 飯 できる 喰う)

「あのレストランの飯は喰える」

b. 那个 餐厅 的 饭 好吃。

(あの レストラン の 飯 美味しい)

「あのレストランの飯は美味しい」

(98)a. 这个 电影 不是 {*会/*可以/?能} 看 的 东西。

(この 映画 否定 できる 見る の もの)

「この映画は見られたもんじゃない」

b. 这个 电影 太 难看 了。

(この 映画 とても 退屈 了₁₊₂)

「この映画はとても退屈だ」

例文(97)、(98)が示すように、中国語では、もし無情物に対する「語用論的評価」を表現したいなら、例文(97b)と(98b)のように、形容詞でそういうプラスあるいはマイナスの評価を表すのが一番自然であると考えられる。つまり、中国語の可能表現が「語用論的評価」そういう意味がないのであろう。

4.2.3 日中語における「束縛的可能」の対照

「束縛的可能」とは、動作主体としての有情物のある能力の有無のことを前提として、自身以外の外部の社会的なルール、規範若しくは話者からの束縛によって、その能力が実現できる／できないということである。まず、中国語の例を見よう。

(99) 休息室里 {*会/可以/*能} 吸 烟
 (休憩室 中 できる 吸う タバコ)
 「休憩室ではタバコを吸ってもいい」

(100) 教室里 不 {*会/可以/能} 吸 烟
 (教室 中 否定 できる 吸う タバコ)
 「教室ではタバコを吸ってはいけない」

(101) 老师 说 现在 你 {*会/可以/*能} 进 F585 研究室 了
 (先生 言う 今 あなた できる 入る F585 研究室 了₁₊₂)
 「今からあなたが F585 研究室に入っていると先生はそう言いました」

(102) 没有 得到 老师 的 许可, 你 不 {*会/可以/能} 进 F585 研究室
 (否定 得る 先生 の 許可 あなた 否定 できる 入る F585 研究室)
 「先生の許可を得るまで F585 研究室に入ってはいけない」

これらの四つの例文が示すように、「束縛的可能」を表す場合、中国語では、肯定文において、“可以”「できる」が一番自然であるけれども、“能”を用いると束縛の意味が含まれていない「外的状況可能」あるいは「無情物の属性可能」になると考えられる。否定文には“可以”、“能”「できる」が両方とも生起できる。“会”「できる」はいずれも生起できない。なお、劉月華(2001:182)では、否定文には“能”、“可以”「できる」両方とも生起できるけれども、一般的には“能”という可能形式で表現したほうが多い¹²と指摘した。一方、日本語の例を見よう。

(103)a. 市条例で、11時以後は、飲食店で酒が飲めなくなった。
 b. 市条例で、11時以後は、飲食店で酒を飲むことができなくなった。

¹² 劉月華(2001:182)の原文は“表达否定意思时, 可以用‘可以’, 更常用‘不能’”である。

- (104) a. 目の前にいる人が許さないから、タバコが吸えない。
 b. 目の前にいる人が許さないから、タバコを吸うことができない。

例文(103)、(104)が示すように、日本語では「可能形」と「ことができる」両方とも生起することができる。また、例文(103)は意味的にももちろん「市条例」が社会的なルールとして看なされることができるけれども、しかし「市条例」が一般的な無情物の属性に見なされ、その無情物の属性によって、酒が飲食店で飲めるかどうかという「無情物の属性可能」を表しているとも見られる。例文(104)も同じく、「他の人が許さない」が他人からの束縛として見なされることができるけれども、しかし「他の人が許さない」が動作主のただ今にいる一種の状況とされ、そういう状況によって、タバコが吸えるかどうかという「外的状況可能」を表しているとも見られる。つまり、「束縛的可能」はあくまで、「無情物の属性可能」と「外的状況可能」から派生して出てくる語用論的意味意味であると考えられる。しかし、中国語と異なり、日本語の「束縛的可能」は「無情物の属性可能」、「外的状況可能」と文法上の差異がないので、本発表では、可能の成立する要因が社会的なルール、規範若しくは発話者からの外部の束縛であるかどうかという点で「束縛的可能」を意味的に「無情物の属性可能」、「外的状況可能」から分離せざるを得ぬ。本節の内容は以下の表 [5] のようにまとめる。

表 [5] 日中両言語の「外的な可能」による可能表現の対照¹³

		中国語			日本語	
		能	会	可以	可能形	(ことが)できる
外的状況可能		○	×	△	○	○
無情物の属性可能	属性の有無	○	×	△	○	○
	語用論的評価	×	×	×	○	×
束縛的可能		▲	×	○	○	○

表 [5] が示すように、「外的な可能」による可能表現を表す場合、中国語では、“能”は無情物に対する「語用論的評価」と「束縛的可能」の肯定文に生起できず、“可以”は「外的状況可能」の否定文、「無情物の属性可能」の否定文、無情物に対する「語用論的評価」に生起できない。“会”はこの場合でいずれも生起できない。日本語では、「可能形」はこの場合でいずれも生起できる。「(ことが)できる」は無情物に対する「語用論的評価」で生起できない。

¹³ 「▲」は否定文のみに使えることを表す。

4.3 日中語における可能表現の「蓋然性判断」の対照

本節では、日本語と中国語における可能表現の「蓋然性判断」を考察する。「蓋然性判断」とは話者が自分の判断に基づいて、事態の成立する見込みがあるかどうかということを表すという意味である。まず、中国語の例を見よう。

(105) 我 想 明天 大概 就 {会/*可以/能} 放晴 了
 (私 思う 明日 だろう 順接 できる 晴れる 了₂)
 「明日、晴れになるだろう」

(106) 恐怕 他 今天 不 {会/*可以/能} 来 了 吧
 (おそらく 彼 今日 否定 できる くる 了₁₊₂ だろう)
 「おそらく彼は今日来ないだろう」

(107) 我 想 他 不久之后 就 {会/*可以/能} 知道 这个 事
 (私 思う 彼 もうすぐ 順接 できる 知る この こと)
 「彼がもうすぐこのことを分かるようになると思う」

例文(105)、(106)、(107)が示すように、この場合では、肯定文と否定文はいずれも可能形式としての“会”「できる」と“能”「できる」が両方とも生起できる。“可以”「できる」がこの場合でいずれも生起できない。なお、呂叔湘(1980:369)では、「この場合に、北の地方の方言は“能”「できる」を使うことが多く、他の地方の方言は“会”「できる」を使うことが多い」¹⁴と指摘した。

一方、日本語では、金子(1980:71)によると、「可能形」或いは「(ことが)できる」では「蓋然性可能」(本発表の「蓋然性判断」に相当する)の意味を表現することができない。

(108)*a. 明日雨が降れる。 (大江 2013:40)
 *b. 明日雨が降ることができる。
 c. 明日雨が降るかもしれない。

(109)*a. 彼は今家にいられる。 (大江 2013:40)
 *b. 彼は今家にいることができる。
 c. 彼は今家にいるだろう。

¹⁴ 呂叔湘(1980:369)の原文は“这类句子，北方口语多用‘能’，别的方言多用‘会’”である。

- (110)*a. 彼は今日来られない。
 *b. 彼は今日来ることができない。
 c. 彼は今日来ないと思う。

例文(108)、(109)、(110)が示すように、日本語における「蓋然性判断」は可能表現で表現するのではなく、「と思う」、「かもしれない」、「だろう」など認識モダリティの標識によって表現されることが自然である。つまり、日本語の可能表現には「蓋然性判断」という意味がないと考えられる。

本節の内容は以下の表 [6] のようにまとめられる。

表 [6] 日中両言語の「蓋然性判断」による可能表現の対照

	中国語			日本語	
	能	会	可以	可能形	(ことが)できる
蓋然性判断	○	○	×	×	×

表[6]が示すように、「蓋然性判断」による可能表現を表す場合、中国語では“会”と“能”は両方とも生起できる。日本語では、「可能形」と「(ことが)できる」は両方とも生起できない。

5 まとめ

本論文では、テンスと意味分類の角度から日本語と中国語の可能形式について対照した。結論は以下ようになる。まずテンスの角度から見れば、日中両言語における可能表現とテンスの関係を表 [7] のようにまとめる。

表 [7] テンスから見た日中両言語における可能表現

	過去	現在	未来	超時間
潜在可能	○	×	×	○
現実可能	○	○	○	×
実現可能	○	○	×	×

表 [7] が示すように、日中両言語における可能表現は「潜在可能」、「現実可能」、「実現可能」という三種類に分けることができる。また可能表現とテンスの関係について、これらの三分類は全て「過去」の意味を表すことができる。「潜在可能」は「現在」の意味と「未来」の意

味を表すことができない。また、「実現可能」は「未来」の意味を表すことができない。「潜在可能」のみは「超時間」の意味を表すことができる。

その上で、テンスから見た日中語における可能表現の共通点と相違点について、結論は以下のようなになる。

- ①可能形式の生起状況から見ると、中国語の可能形式が「過去」の「実現可能」を表すことができないのは日本語との最も顕著な相違点であると考えられる。代わりに中国語ではこの場合で「動詞+補語+了」という形式によって表現される。また否定文に用いる否定詞も特殊であり、“不”ではなく、“没”である。
- ②テンスを提示する手段から見ると、日本語では可能形式が「過去形」と「現在未来形」という二種類の語形変化によって、テンスの意味が表示されるが、動詞の語形変化を持たない中国語の可能表現は時間副詞に対する依存性が高く、テンスの意味がすべて時間副詞によって表示されると考えられる。しかし、日本語と同じく、中国語の可能表現は「超時間」の「潜在可能」を表す場合で、時間副詞の生起が許されないと考えられる。

つづいて、意味分類の角度から日本語と中国語における可能表現を再分類し、各意味分類における各可能形式の生起状況を考察した。再分類した日本語と中国語における可能表現の意味は図 [1] のようになる。

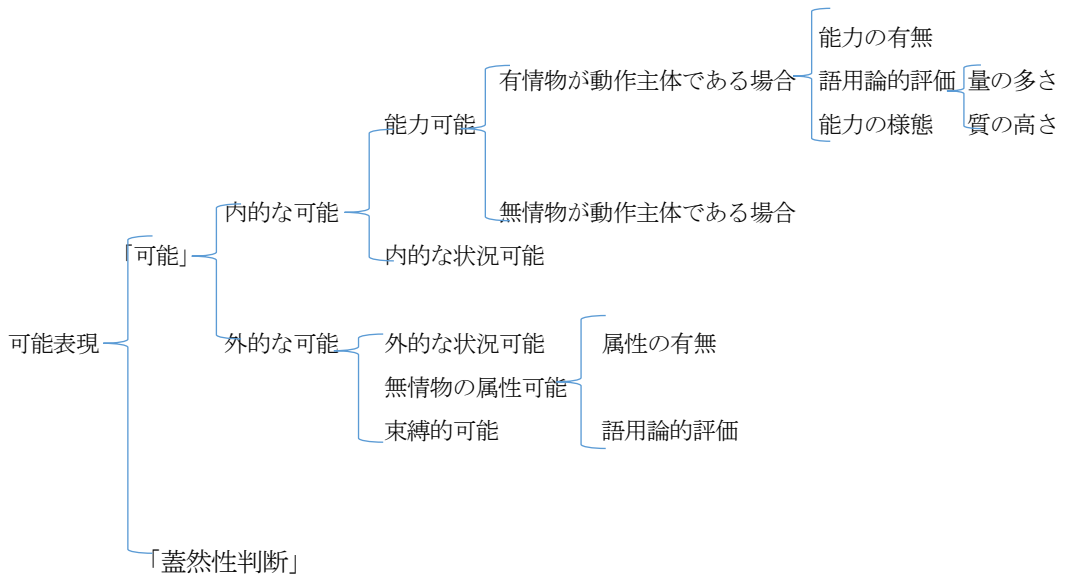


図 [1] 意味から見た日中両言語における可能表現

図 [1] が示すように、可能表現は「可能」と「蓋然性判断」という二つの意味に分けられる。そして、可能の成立する要因が動作主体の内部に位置するかどうかによって、「可能」は「内的な可能」と「外的な可能」という二種類に分けられる。「内的な可能」には「能力可能」「内的な状況可能」という二つの下位分類があり、動作主体の違いによって、「能力可能」がさらに「有情物が動作主体である場合」と「無情物が動作主体である場合」に分けられる。「有情物が動作主体である場合」には「能力の有無」「語用論的評価」「能力の様態」という三つの下位分類があり、「語用論的評価」はさらに「質の高さ」と「量の多さ」という二種類に分けられる。一方、「外的な可能」には「外的状況可能」「無情物の属性可能」「束縛的可能」という三つの下位分類があり、「無情物の属性可能」はさらに「属性の有無」「語用論的評価」という二種類に分けられる。

日中語における可能表現の意味の共通点と相違点について、結論は以下のようになる。

- ③可能形式の生起状況から見ると、中国語の三つの「可能形式」はそれぞれの生起状況が明確に違っている。それらの中には、「能」の汎用性が一番高く、「質の高さ」、無情物に対する「語用論的評価」と「束縛的可能」の肯定文以外の意味分類で生起することができる。“会”の汎用性が一番低く、「能力の有無」、「質の高さ」、「蓋然性判断」以外の意味分類で全て生起することができない。一方、日本語の二つの「可能形式」はそれぞれの生起状況が、無情物に対する「語用論的評価」以外の意味分類で同じである。
- ④可能形式の生起状況と文の種類(肯定文もしくは否定文)の関係から見ると、日本語では、「可能形」と「(ことが)できる」との生起状況は両方とも文の種類と関係がないと考えられる。しかし、中国語では、“可以”「できる」は「束縛的可能」を表す場合を除き、全て肯定文のみに生起できる。“能”は「束縛的可能」を表す場合で否定文のみに生起できる。“会”の生起状況は文の種類と関係がないと考えられる。
- ⑤「可能」の意味から見たら、中国語の可能表現には無情物に対する「語用論的評価」という意味意味がない一方、日本語の可能表現には有情物に対する「語用論的評価」という意味意味がない。また、渋谷(1995:120)によると日本語では「(ことができる)」は文章語的であり、「可能形」は口語的であるという異なりがある。しかし、中国語では三つの可能形式の間にはそのような異なりがないと考えられる。
- ⑥「蓋然性判断」の意味から見ると、中国語の“会”「できる」と“能”「できる」は「蓋然性判断」を表すことができる一方、日本語では、「可能形」と「(ことが)できる」は両方とも「蓋然性判断」を表すことができない。つまり、日本語の可能表現には「蓋然性判断」という意味がないと考えられる。

用例出典

本発表表において使用されている例文の中では、出典が明示されていない例文は筆者の作例である。

略号一覧

- 了₁ 動詞、形容詞の後ろにおかれ、動作、変化、状態の実現を表す
 了₂ 文末におかれ、変化や変化に気づくことを表す
 了₁₊₂ “了₁”と“了₂”が合わさっており、“了₁”と“了₂”の両方の意味とも含んでいると考えるものである¹⁵。
 了(liǎo) 読み方は“了₁”と“了₂”との“le”ではなく、“liǎo”である。「完了」の意味を表す結果補助詞である。

参考文献

日本語で書かれた参考文献（五十音順）

- 青木 怜子(1980)「可能表現」『国語学大辞典』 pp.169-171. 東京堂出版.
 荒川 清秀(2003)『一步すすんだ中国語文法』 pp.126-127. 大修館書店.
 大江 元貴(2013)『日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知的・語用論的研究』筑波大学博士論文.
 大江 元貴(2015)「中国語の可能形式“能”“会”“可以”：「可能」概念を構成する力に着目した分析」『文藝言語研究. 言語篇』 67. pp. 41-67.
 奥田 靖雄(1978)「現実、可能、必然(上)」『ことばの科学 1』 pp. 181-212. むぎ書房.
 奥田 靖雄(1996)「現実、可能、必然(中)」『ことばの科学 7』 pp. 137-173. むぎ書房.
 大崎 志保(2005)「日本語の自動詞による可能表現-動詞制約を中心に-」『日本語文法』 5(1). pp. 196-211.
 金子 尚一(1980)「可能表現の形式と意味(I) — “ちからの可能”と“認識の可能”について —」『共立女子短期大学紀要』 23. pp. 62-74.
 金子 尚一(1981)「能力可能と認識可能をめぐって—非情物主語ということ—」『教育国語』 65. pp. 103-112.
 久野 暲(1983)『新日本文法研究』大修館書店.
 黄 麗華(1995)「中国語の可能表現「能」「会」「可以」」『日本語研究』 15. pp. 78-87.
 小矢野 哲夫(1979)「現代日本語可能表現の意味と用法(I)」『大阪外国語大学学報』45. pp. 83-98.

¹⁵ “了₁”と“了₂”についての解釈は荒川(2003:126-127)によるものである。

- 小矢野 哲夫(1981)「現代日本語可能表現の意味と用法(Ⅲ)」『大阪外国語大学学報』54. pp. 21-34.
- 呉 志寧(2016)「日本語と中国語における可能表現に関する対照研究-日本語の潜在可能文と可能の顕在化文に対応する中国語について-」『言語・文学研究論集』16. pp. 69-77.
- 朱 德熙(1995)『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説—』杉村博文・木村英樹訳. 白帝社.
- 渋谷 勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1). pp. 1-39.
- 渋谷 勝己(1995)「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」『日本語類義表現の文法(上)』pp. 111-120. くろしお出版.
- 曹 峻璋(2022)『日本語と中国語における可能表現の対照研究 —可能標識の有無を中心に—』新潟大学修士論文.
- 遲 皎潔(2014)「無標識可能文の性質について」『文化』78(1・2)pp. 41-85.
- 張 威(1998)『結果可能表現の研究-日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法 3』くろしお出版.
- 宮崎 和人(2013)「モダリティとしての〈可能〉—リアリティと時間的な意味とのからみあい—」『岡山大学文学部紀要』59. pp. 87-98.
- 宮崎 和人(2014)「ポテンシャルな可能・アクチュアルな可能と認識的な可能性」『岡山大学文学部紀要』62. pp. 51-61.
- 宮崎 和人(2020)「可能表現の研究をめぐる」『国語と国文学』97(10). pp. 3-17.
- 楊 明(2006)「中国語と日本語における実現表現の文法的な形」『千葉大学社会文化科学研究』12. pp. 276-289.
- 李 娜(2019)「日中可能表現と動詞の共起状況についての考察」『北東アジア諸言語の記述と対照』pp. 17-31.

中国語で書かれた参考文献(ABC 順)

- 安本 真弓(2015)「可能補語的句法功能和语义」(可能補語の構文メカニズムと語義)『日本語と中国語のモダリティ』pp. 260-276. 白帝社.
- 侯 瑞芬(2009)「从力量与障碍看现代汉语情态动词“可以”“能”“会”」(力と障碍から見た現代漢語モダリティ動詞“可以”“能”“会”)『语言学论丛』40. pp. 270-298.
- 劉 月華、潘 文娛、故 韡(2001)『实用现代汉语语法』(实用現代漢語文法)商务印书馆.
- 劉 月華(1980)「可能補語用法的研究」(可能補語の用法の研究)『中国語文』157. pp. 246-257.
- 呂 叔湘(1980)『現代漢語八百詞』(現代中国語 800 語)商务印书馆.